



研究開発の活性化について

専務取締役 榎 田 吉 信

組織の活性化を図るための施策はさまざまである。制度や仕組みの面からも諸々の制度だけでなく、経営戦略の策定、組織構造の再編等々いくつかの取り組み方がある。もうひとつの切り口として、組織要員の気持ちに関わる面がある。何といたっても“企業は生き物”であることを考えると、一人ひとりが生き生きとした気持ちで働ける職場をつくるのが、企業組織を活性化し、持てる力を最大限に発揮するもっとも基本的な条件であろう。

同様の切り口でみて、企業の研究開発部門が活性化している状況というのは、全員が生き生きと元気良く、活発な議論をしながら活動していて、研究成果がうまく商品化に結びつき、社内の人達からも期待に満ちた目でみられている組織の状況と言える。

“ある問題について色々な角度から議論する”は、英語では discuss となる。その語源はラテン語であり、元の意味は“振って粉々にする”で、転じて“議論する”の意味となった。意味合いの変遷に興味を抱くとともに discuss という言葉のもつ意味の深さを感じ入るのである。

粉々になる位に精細に分析し、深く洞察・考察し、議論していかないことには、新しい創造は得難いものと思う次第である。

研究開発のことは、いかに弾力的発想に富む人材を、いかに多くもつかに尽きるといわれており、当社の多くの弾力的発想に富む人達が、活発な frank discussion を織り込むことでの新しい創造に期待したい。なお、frank は古期フランス語を語源とする。

活性化研究開発の成果について述べたが、もとより経営戦略上、研究開発の output の重視が、叫ばれ続けている。多くの研究テーマのなかから、いくつかの成果が生まれる。だとすればより多くのテーマに取り組むに限る。経営資源の範囲内での展開となると、実験規模及びテーマ当たり人数の極少化といったコストダウンの見直しも必要となろう。

“選択と集中”に逆行するものとの誤解を招かぬために言及するが、研究開発における“選択と集中”とは、目指す分野とどのような進捗段階から、それを徹底していくかという問題であると考えている。

ボーダーレス化が進み、経済環境の変化は目まぐるしくなった。一時的に安定した状態にあっても、それは累卵のバランスが保たれているに過ぎないとみるべきであろう。そうした環境変化の影響を受けにくい強い事業の構築を可能とするのは、技術の問題であると敢えて言いたい。研究開発部門を初めとして技術陣全体が奮起せねばならない。

以 上